

# 昔話法廷

## 論点表

### 第9話「ブレーメンの音楽隊」裁判

#### 起訴状朗読・罪状認否

##### 検察側

・ロバは、イヌ、ネコ、オンドリをけしかけ、盗賊たちの家を襲撃。暴行を加えて怪我をさせ、財産を奪った。そして、逮捕されるまでの1ヶ月間、家を不法に占拠し続けた。強盗致傷罪にあたる。

##### 弁護側

- ・盗賊たちを襲った事実は認める。
- ・しかし、犯行の動機になったのは、「悪い盗賊たちをこらしめたい」という正義感。
- ・しかも、犯行に至るまでのロバの境遇には、同情の余地がある。
- ・執行猶予を求める。

#### 検察側証人：盗賊一家の長男

※一家はロバに襲われた後全員逮捕され、すでに刑務所に入っている。

##### 検察側

- ・父の誕生祝いをしているところに、ロバたちが窓をつきやぶって襲い掛かってきた。あまりの恐ろしさに這うようにして逃げた。
- ・夜中に様子を見にもどったところで、長男は、ロバたちにひどい暴行を受け大怪我を負った。
- ・取り返す手立てはなく、家は、あきらめるしかなくなった。
- ・家を奪われた後、一家は厳しい野宿生活を強いられた。橋の下で、家族で身を寄せ合って、寒さをしのぐしかなかった。
- ・ひと月ぐらいして、父が風邪をこじらせ危険な状態になり、そのまま亡くなった。「ロバたちは、父を死に追いやった」。

##### 弁護側

- ・盗賊一家は、50件もの窃盗の罪で指名手配されていた。
- ・貧しい家庭からも容赦なく盗みを働いた。
- ・ロバたちに奪われた家も、盗んだお金で建てたもの。
- ・ロバたちに襲われたとき、すぐに警察に通報していれば、家を奪われることも、父親の具合が悪くなることもなかったはず。
- ・通報しなかったのは、自分たちが逮捕されるのを恐れたから。父親が死んだことをロバたちのせいにするのは筋違い。

#### 弁護側証人：ネコ

※ロバと一緒に盗賊を襲ったネコ、イヌ、オンドリには、すでに執行猶予の判決が出ている。

##### 弁護側

- ・ネコは年老いてネズミが捕まえられなくなったので、主人に川に投げ込まれ始末されそうになった。逃げ出して途方に暮れていた時に、ロバに出会った。
- ・ロバは、ネコに、『君はその爪でギターを弾くのがとてもうまい。一緒に ブレーメンに行こう!』と言って、熱心に同行を誘った。
- ・その後、ネコと同じような境遇にあったイヌとオンドリも、ロバに誘われてブレーメンを目指すことになった。
- ・ネコ、イヌ、オンドリにとって、ロバは、“生きる希望”をくれた恩人。
- ・ネコ、イヌ、オンドリは、新しい仕事を見つけて、小さな家を借りて共同生活をしている。
- ・ネコ、イヌ、オンドリは、体調が良くないロバの身元引受人になることを申し出ている。ロバの面倒を見る。力になりたいと思っている。

##### 検察側

- ・盗賊たちを襲った後、なぜブレーメンに向かわず、家に居ついたのか。ブレーメンで音楽隊に入ることは、“生きる希望”だったはずなのに。
- ・ブレーメンには行こうとした。しかし、急にロバが倒れてしまって出発が延期になった。

- 数日経って改めて出発しようとしたが、今度は、土砂崩れで道がふさがっていると聞いて、また延期になった。たまたま出発できない事情が重なって、居ついてしまっただけ。家を奪うつもりなんてなかった。
- 土砂崩れで道がふさがっているという情報は、ロバから聞いた。

## 被告人質問:ロバ

### 弁護側

- ロバは、ブレーメンに向かうまで、ずっと小麦粉を運ぶ仕事をしていた。
- 力強く黙々と働く姿は、仲間うちでも評判だった。
- しかし、年をとってからは体が弱り、満身に働けなくなってしまった。
- 主人には「用なし」「役立たず」と何度もものしられて…。食事を一切もらえず、餓死させられそうになった。
- ロバは「自分には生きていく価値がないのだ」と思い、絶望した。
- 逃げ出したロバは、ネコたちと出会った。「一緒にいると本当に楽しくてにぎやかで…。こんな老いぼれでも『まだ何かできる』『なんだってできる』という自信がわいてきた」。
- 盗賊たちを襲おうと思ったのは、悪いやつらをこらしめたいと思ったから。
- 誰かの役に立って、自分たちが『用なし』じゃないことを証明したかった。

### 検察側

- 事件のあった周辺で、土砂崩れが起きた事実はどこにもない。ロバはウソをついていた。
- ロバはブレーメンを目指したのに、楽器は何も弾けない。
- ロバがブレーメンに向かったのは、音楽隊に入るためではなく、実は“死に場所”を探すためだった。自ら命を絶とうと考えていたのだ。
- ロバが、ネコたちを誘ったのは、一緒に死んでくれる相手が欲しかったから。1人で死ぬのはさびしかった。
- しかし、ネコたちといて、楽しかったのは本当。ロバは、彼らからいっぱい力をもらった。
- 次第に、ロバは、ネコたちと、ずっといっしょにいたいと思うようになった。
- ロバは“死に場所”ではなく、“生きる場所”が必要になった。しかし、ロバは、楽器が弾けなかったので、ブレーメンを“生きる場所”にすることはできなかった。
- ロバはブレーメンに行くのが怖くなった。そこは、楽器の弾けない自分が、また役立たずになってしまう場所だと思ったから。
- そんな時、ロバは、森のはずれでうってつけの家を見つけた。指名手配中の盗賊たちの家。盗賊なら、家を奪われても通報できやしないと、ロバは考えた。
- ロバは、ネコたちに本心を隠し、「悪いやつらをこらしめてやろう」とけしかけた。家さえ手に入れてしまえば、あとは理由をつけて居ついてしまえばいいという筋書きだったのだ。
- ネコ、イヌ、オンドリは、ロバに思いをぶつける。「なんで言ってくれなかったんだ!おれたち仲間なのに…」

## 最終弁論

### 検察側

- ロバは、無関係の人の幸せな生活を躊躇なく奪った。しかも、その動機は、正義感とは程遠い身勝手極まりないもの。
- ロバは信じてくれていた仲間をあざむき、犯罪にひきずりこんだ。
- ロバは刑務所に入り、犯した罪をしっかりと償うべき。

### 弁護側

- ロバは確かにウソをついたが、すべてを白状したのは、罪を犯したことを悔い反省しているから。
- ネコ、イヌ、オンドリは、あざむかれていたことを知ってなお、ロバを仲間として受け入れている。
- ロバは高齢で体調がよくない。仲間たちの支えの中で罪と向き合うべき。
- ロバは執行猶予にすべき。